

## 2) ニゴロブナ成熟状況調査結果

根本守仁・太田滋規

**【目的】** ニゴロブナは、ふなずしの原材料であり、抱卵した雌で非常に商品価値が高い。一般に取引の場での”メス”と”オス”は腹の膨満状態等によって区別されているが、漁獲時期によっては雌であっても抱卵していない、”オス”として扱われている個体が多数存在することが、これまでの調査結果から明らかとなっている（三枝 1999）。このため、商品価値を高めることを目的に、本年度から漁獲の開始時期を1月とすることが資源管理計画で定められた。しかし、この計画の有効性を判断する材料は、平成11年度の調査結果しかなく、さらにデータを蓄積する必要があるといえる。そこで、沖曳網での漁獲物を対象に生殖腺の発達状況の調査を行った。

**【方法】** 調査には、平成14年11月28日から平成15年3月26日に、漁業者4名によって琵琶湖北湖において沖曳網および小糸網で漁獲されたニゴロブナを用いた。標本は、沖曳網での漁獲物は冷凍保存後に解凍したもの、小糸網での漁獲物は漁獲直後のものを基本とした。そして、体型を測定し、開腹して生殖腺を観察して性別を判定するとともに生殖腺重量を測定し、生殖腺重量比（GSI）を算出した。

**【結果】** 調査に用いたニゴロブナは、沖曳網での漁獲物が746個体、小糸網での漁獲物が31個体であり、合計777個体であった。これらのうち漁獲対象となるのは資源管理計画で定められた全長180mm以上の個体であり、それらは全体の22.7%に相当する176個体であった。そして、その内訳は、雌が113個体、雄が60個体、鮮度が悪く調査できなかったものが3個体であった。

全長180mm以上の雌の月別の体長とGSIの関係を図1に示した。これまでの調査から全長180mm以上の個体は1歳魚以上のものであると考えられており、体長とGSIとの間には、特に関係がみられなかった。各月のGSIは、11月では0.32～5.92～11.32%（最小～平均～最大）、12月では0.47～5.29～12.16%、1月では0.79～12.06～21.85%、3月では0.66～9.15～17.47%であった。

さらに、これまでの調査結果から、雌については、GSIが6%未満を”オス”、6%以上を”メス”として扱われていることが分かっている。そこで、GSIが6%未満および6%以上の個体数およびその割合を表1に示した。GSIが6%未満の個体数の割合についてみると、11月では57.1%、12月では50%と全体の約半数を占めていたのに対し、1月では9.5%と急激に減少していた。平成11年度の沖曳網での漁獲物の調査結果では、体長155mm以上の個体についてGSIが6%未満が12月で71.64%、1月では47.30%と、今回の調査結果と比較して割合は大きく異なっているものの、1月になるとGSIが6%以上の個体が増えるという現象は一致していた。

なお、3月では、GSIの平均値が1月より下がっており、また6%未満の個体数の割合33.3%と1月より増加していたが、調査したサンプルの問題か、漁獲された場所の問題なのか、今後さらに検討する必要がある。

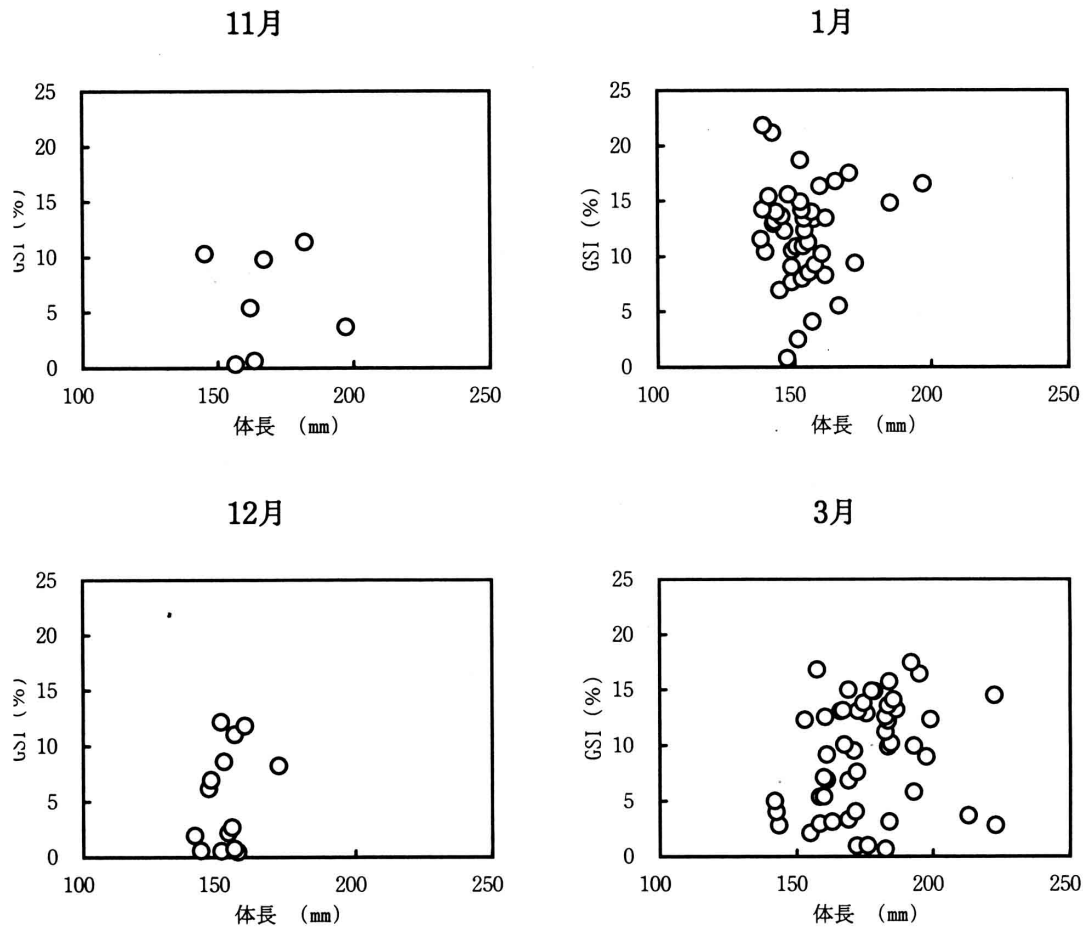


図2 ニゴロブナ雌の月別の体長とGSIの関係.

表1 全長180mm以上のニゴロブナ雌のGSI6%未満と6%以上の個体数とその割合

月	調査 個体数	GSI:6%未満		GSI:6%以上	
		個体数	割合(%)	個体数	割合(%)
11月	7	4	57.1	3	42.9
12月	14	7	50.0	7	50.0
1月	42	4	9.5	38	90.5
3月	50	17	34.0	33	66.0